

# 覚悟を決めたことで 見えてくる未来もある

近江精機

スクリュードライバービットやインパクトソケットを製造している近江精機(東京都国分寺市)は、製造現場の責任者だった製造部長が事業承継した従業員承継のパターンである。承継者は創業者の親族のはずだったが、就任前に病死。白羽の矢が立ったのは、1人の管理職だった。自身が経営者になることをまったく考えていなかった、一社員は事業承継に向き合い、準備を進めて、自分と家族だけでなく、従業員とその家族を守ることを覚悟し、経営の舵取りを行う。手探りのことも多いなかでも現在は希望を見出して、経営と人づくりを進めている。

を創業した。

現在、同社を率いる社長の藤木研二氏(写真4)は「ねじを締めるという作業は簡単なように思えますが、ねじの大きさや材質、必要なトルクなどによって最適な工具は変わってきます。さらに作業の品質を優先するのか、それよりスピードを優先するかによっても微妙な調整が必要で、私たちはそういった細かい注文に応えられる会社として、弱電や自動車関係のメーカーに広く製品を納めてきたのです」と説明する。

技術者である藤木氏が入社したのは1992年の29歳のときのことだ。

「もともとモノづくりの職場でしたがその後、製造業ではない営業職を経て、やはり、モノづくりが良いと転職しました」(藤木氏)。

そんな藤木氏にとって、近江精機は理想の職場だった。

「創業者の人柄のおかげか風通しが良い会社でした。キャリアに関係なく提案ができ、評価されればちゃんと製品に反映されます。モノづくりにこだわりを持った職人肌の社員も多く、技能に敬意

## 技術者として 人生をまっとうするつもりだった

創業者の望田均氏は工具を扱う商社で営業の仕事をしてきた。しかし、ユーザーが求める特殊品に対応できるスクリュードライバービットやインパクトソケット(写真1、写真2、写真3)のメーカーがなかったため、自分たちでつくることができれば、顧客に喜んでもらえると考え、近江精機

### 会社概要

会社名：近江精機株  
所在地：〒185-0014  
東京都国分寺市東恋ヶ窪5-7-36  
設立：1969年  
従業員数：46名  
事業内容：スクリュードライバービット・インパクトソケット・付随するアクセサリーの設計・製造・販売

写真1 スクリュービット



写真2 ソケット



写真3 ビットのアクセサリー関連製品



を払いながら、新しい技術や方法にも関心を持つ社風を、すぐに気に入りました」(藤木氏)。

そのときには、まさか自分がこの会社の経営を任されるようになるとは考えもしなかった。

「昔から金勘定は得意なタイプではなかったので、経営者に向いているとは思っていませんでした。ですから、技術者として人生をまっとうしていくつもりだったのです」と当時考えていたことを話す。

写真4 藤木 研二社長



### 創業者一族ではなく 社員からの後継者へ

当初、近江精機では後継者の目処ははっきりついていた。

創業者の望田氏には娘が2人いた。次女が社長になることを承諾していたため、望田氏の頭の中では、彼女をオーナー家の代表としてトップに据え、会社の運営は営業・製造・総務の責任者たちがタッグを組んで行うという計画があった。

運営を任される三役のうち、製造部長として、製造部門のリーダー兼工場長の役目を務めていたのが藤木氏だった。ただし、この段階では、まだそれほど具体的な話はされていない。

「次期社長を誰にするかといった説明はないまま、『これからは3人ががんばってくれ』と言われるだけでした。もっとも、私も社長になろうという気はさらさらなかったので、『わかりました』と答えるだけでした」(藤木氏)。

しかし、創業者の次女が30代で病死してしまうという不幸が生じた。それにより、後継者問題は混迷することになった。

「しばらくは創業者が社長を続けることになりました。本人はまだ元気だったので大きな問題はな

かったのですが、70代になるとスムーズにリース会社に対応なくなり、業務上も支障が生じてきました。しかし、オーナー家の長女は社長就任にまったく関心がなかったため、ほかに人材を求めるしかありませんでした」(藤木氏)。

それでも他人事だと気にしていなかった藤木氏に対して、このころからアプローチが始まる。創業者からは何も言われなかったが、相談役のようにになっていた税理士から、話が出てくるようになった。

しかも、気がつくとはほかの候補者がいなくなっていた。

「本来なら私よりふさわしい営業のトップが、体調を壊して退職しました。年齢やキャリアを考えると、私しか考えられなくなっていたのです」と藤木氏は説明する。

製造の責任者として工場を支え、QCサークルや各種改善活動などの導入を率先して進めてきた管理能力の高さなどが評価されたようだが、当人は「工場の管理と経営はまったく違います」と最